

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21H02223

研究課題名(和文) 持続可能な地球環境に必要な「変革的な適応」を実現する為のまちづくり研究の再資源化

研究課題名(英文) Re-finding Machizukuri research to achieve the transformative adaptation necessary for a sustainable global environment.

研究代表者

土肥 真人 (Dohi, Masato)

東京工業大学・環境・社会理工学院・教授

研究者番号：20282874

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コミュニティレベルでのまちづくり活動が、地球の持続可能性に必須とされる「変革的な適応」に貢献する可能性と考えられる機序を明らかにした。まちづくり実践者(18事例)へのディープインタビューより、身近な環境を大切にすることとグローバルな課題の解決に向かうことを架橋するまちづくりの「新しい価値」が、それぞれのまちづくり活動の中に同定された。例えば、「場所に根付く」「土地の知恵(古くから伝わる民衆の知恵)」「語り伝え未来へつなぐ方法」などのまちづくり活動の価値は、「社会システム」「民主主義」「文明」などのより大きなスケールの価値に、地域固有の回路でつながっていることを具体的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、1. まちづくり活動が生み出す固有の価値がより大きな範囲の環境や社会的不正の改善に資するものであることを、具体的に示した点、2. そのためのインタビューとディスカッションという方法論の提示、の2点にある。社会的意義としては、もとよりまちづくり活動そのものが社会的意義の高い対象であるが、加えてその意義は当該地域の範囲を超えてより大きな社会的空間的範囲に及ぶことを示したことで、まちづくり活動を大いにエンカレッジすることができる。実際に、インタビュー対象であるまちづくり実践者らは、見いだされた新しい価値を自覚し、さらにまちづくり活動を進める意思を示している。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the potential and possible mechanisms by which community-level Machizukuri activities can contribute to “transformative adaptation,” which is considered essential for global sustainability. From deep interviews with Machizukuri practitioners (18 cases), “new values” of Machizukuri that bridge caring for the immediate environment and moving toward solving global issues were identified in each community development activity. For example, the values of community development activities such as “rooted in place,” “wisdom of the land (wisdom of the people handed down through the ages),” and “ways to tell stories and connect them to the future” were specifically linked to larger-scale values such as “social system,” “democracy,” and “civilization” through locale-specific circuits.

研究分野：都市計画

キーワード：まちづくり研究の再資源化 地球の持続可能性 変革的な適応 ローカルなまちづくり 新しい価値  
価値変容

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

地球環境の危機が科学的に指摘され、国際社会が持続可能な発展に取組み始めて数十年が経つ。この間、環境学や生態学などの自然科学分野では、地球規模の環境変化メカニズムの解明や将来予測が進展し、並行して政治学や社会学、経済学などの社会科学分野では、地球環境を破局に導かないための持続可能な人類社会の在り方や、その実現に向けた社会変革プロセスについて研究が進められてきた。特に地球環境への対策に有効な社会変革プロセスに関する研究群においては、国際社会における合意形成、SDGs などの国家間の政策目標を国や地方自治体の政策に落とし込む方策、政府や企業、NGO など異なるセクターへのアプローチ方法とパートナーシップの重要性などが論じられ、一定の知見を得ているところである<sup>1)</sup>。

しかしこれらの研究群は、地球規模の環境問題に対応する社会システムとしてまず国際社会を想定し、国際レベルの意思決定を国や自治体といったローカルレベルの目標に分解した上で各レベルでの導入インセンティブを模索するという、トップダウン型の発想を根底に置いている。そのため、変革を個人レベルの日常生活様式や行動パターンにまで浸透させるための有効な方策を見出すに至っていない。一部には市民の啓発・学習プログラムの事例検討や効果測定の方法に関する研究が見られるが、啓発や教育といった手法は関心を持つ一部の人々にしか影響が及ばない、対策の必要性は理解されても実際の行動や生活パターンの変化につながらない等の限界があり、人類社会の営み全体を持続可能なものへ変革していくという大きな目標にとって個々人の価値観の変革と生活様式の変化は決定的な要素であるにも関わらず、その実現のための効果的な方法・技術については、殆ど知見が蓄積されていないのが現状である。

一方、研究代表者らが専門とする都市計画・まちづくりの分野では、行政や専門家によるトップダウン型の都市計画に対し、住民が主体となって日常生活の環境を議論しデザインするボトムアップ型のまちづくり活動が、1980年代に始まった。参加のまちづくりは日常生活圏を共有する地域住民らの協働を可能にし、地域学習や相互学習を通じてコミュニティに共有される価値を見出し、それを空間デザインや社会システムに実現する手法・技術である。開始から凡そ40年が経ち、全国の自治体でまちづくり活動が実践されるようになった結果、その事例、効果、方法論に関する知見と研究が膨大に蓄積されている。特に本研究の文脈において肝要なのは、まちづくりが個人の日常生活に直結するコミュニティレベルに主眼を置き、参加と協働を通じて、個々人が短期的・部分的・私的な利益よりも長期的・包括的・公共的な価値を選択し行動することを可能にする技術体系を確立してきた点である。当分野の知見の蓄積を、地球環境と調和する持続可能社会への変革が喫緊に求められる現代の重要な資源として位置づけ直すことは重要な作業である。

日常生活を構成するコミュニティレベルのまちづくり活動が地球の持続可能性に必須とされる変革的適応に貢献する可能性とその機序を明らかにするのが、本研究の「問い」の核心である。

SDGs などのトップダウン型・バックキャスト型の持続可能性への戦略は、ボトムアップ型・フォアキャスト型のコミュニティレベルのまちづくり活動に接続されることにより、変革的適応を実現できるのではないか、というのが核心の「問い」に至る、学術的背景である。まちづくり活動は身近な環境への人々の知識と働きかけに基づき成立するのであり、これを延長できれば地球環境の持続可能性へのボトムアップのアプローチが確立できるのではないか。まちづくり活動の研究の蓄積を地球環境の維持のために再資源化することが可能であり、そのための研究が喫緊に求められていると考えた(図1参照)。

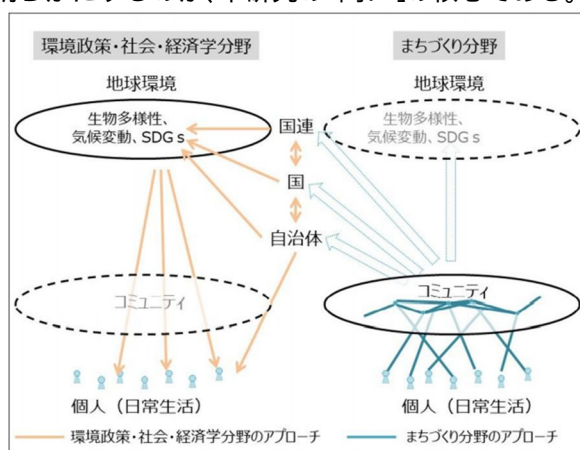


図1: これまでの学術的アプローチ

### 2. 研究の目的

本研究は、日常生活を構成するコミュニティレベルでのまちづくり活動が、地球の持続可能性に必須とされる「変革的適応(transformational adaptation)<sup>2)</sup>」に貢献する可能性とその機序を明らかにすることを大目的とし、学術的研究の具体的な3つの目的に表す。

目的1. コミュニティレベルで活動するまちづくり実践者へのディープインタビューとディスカッションを通じて、ローカルなコミュニティで見られるまちづくり活動に、今日の世界が必要とする「新しい価値」を見出し、地球規模のグローバルな課題解決に向けて普遍化できるかどうかについて検討する。

目的2. SDGs チェック まちづくりの事例を体系的(実施時期・地域、主体、目的、活動内容、背景と文脈、参加手法、などに配慮する)に収集し、その目的と内容についてSDGsのター

ゲットと照合する。この作業によりまちづくり活動にある SDGs に直結する要素を抽出するとともに、ターゲットに適合しないまちづくりの要素を明らかにする（SDGs のターゲットは国を実施主体として想定しているため、コミュニティレベルのまちづくり活動にそのまま適用できない項目が多くあること、またコミュニティレベルの活動の重要な要素が SDGs の評価から取りこぼされることが観測されている<sup>3)</sup>）。

目的3 .国内外の研究者およびまちづくり実践者における共有知の形成を目的として、オンラインプラットフォーム上に研究成果を随時示し、議論を行う。またまちづくり専門家が集う国際会議において地域課題と地球環境の保全についてディスカッションを行い、コミュニティレベルで生じる価値をグローバルな課題解決に必要な価値変容に接合する方法について、より広い文化的文脈から検討する。

### 3. 研究の方法

(1) 研究分担者を通して、活動地域に配慮しながらまちづくり実践者を選び、研究協力者として依頼する。協力者が良く知るまちづくり事例を抽出しディープインタビューを実施する（18 事例、各 2 時間程度 × 2 回）。

インタビューから把握されたまちづくり活動の実態をまとめ、先行研究の成果と比較検討し、一般的に認められている価値 <既存のまちづくりが重視する価値>、一般には明確に言語化されていない価値 <実践者から提示された価値>、<実践者と聞き手のディスカッションから言語化された価値>を抽出する。ディカッションでは、特に地球環境の危機と世界的な格差の拡大は、日常の暮らしの舞台であるまちとも深く関連しており、これらを克服するための新しい価値が、まちづくりの活動に懐胎されているのではないかと、という聞き手の立場から、質問、回答のディスコースを展開する。

インタビューで抽出できた価値を既知と未知に分類するにあたっては、先行研究や書籍、資料などの文献を参照した上で、実践者とインタビューアの議論に拠った。

(2) まちづくりの事例を、【時期、地域、目的、内容、主体、関係者、背景と文脈、参加手法】などからなる統一フォーマットに整理し、これに基づき SDGs の 17 ゴールおよび 169 ターゲットと照合する。

(3) 国内外の研究者およびまちづくり実践者における共有知の形成を目的として、オンラインプラットフォーム（既存のオンラインシステム miro を活用）上に研究成果を整理し、これまでインタビューしてきた対象者に共有するとともに、コミュニティレベルにおける変革的適応の意義や価値として研究協力者と共有することで、まちづくり活動へとフィードバックする。またまちづくりの実践者・研究者による国際学会で、本研究テーマを議論、検討する。

### 4. 研究成果

#### 4-1. インタビュー調査とまちづくり活動が有する「新しい価値」(成果：雑誌論文 1 - 6)

まちづくり実践者(18 事例)のインタビューから、当該のまちづくり活動の実態を確認し、まちづくり活動が有する「既知の価値」および「新しい価値」について同定した(表 1 参照)。

例えば、豊山町の「町民討議会議」の取組み事例では(事例 10)、熟議民主主義と住民参加型

まちづくり双方の手法が融合した運営が行われてきた。豊山町のまちづくり実践者とのディスカッションからは、(A)豊山町の文脈と世界の民主主義の文脈の交差する価値(地形 × 歴史 × 誇り)、(B)熟議と合意形成の空間的社会的スケールを検討できる価値、(C)市民にある住民性と住民にある市民性を示した価値など、7つのまちづくりの新たな価値が同定された4)(図 3 参照)。豊山町民は、「町民討議

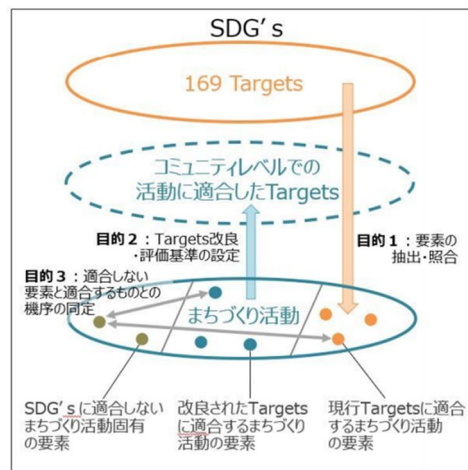


図2：本研究の全体像

表1 インタビュー調査対象一覧

対象地	活動テーマ	インタビュー対象
1 愛知県岡崎市	乙川の流域づくり	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた,
2 東京都大田区	大岡山・千束地区まちづくり協議会の活動	杉田早苗氏(岩手大学)
3 東京都世田谷区	子ども食堂の活動	子どもでつながるハートクラブ
4 岩手県住田町	被災者支援から地域支援	一般社団法人邑サポート
5 北海道札幌市	広域の市民活動の連携	市民活動広域ネットワーク アクティブ・アクティブ
6 福岡県福岡市	有明湾、博多湾の環境運動、	ウェットランドフォーラム
7 東京都世田谷区	子育て支援とまちと川	NPO法人 多摩川あそび村
8 青森県黒石市	黒石の自然と歴史のまち育て	NPO法人横町十文字まちそだて会
9 熊本県水俣市	ふるさとみなまた 夏休み いなか学校	一般社団法人ハートリレープロジェクト
10 愛知県豊山町	熟議型民主主義のまちづくり	NPO法人豊山町まちづくりサポーター
11 石川県珠洲市	限界集落から現代集落へ	株式会社ゲンダイシユウラク
12 東京都大田区	コミュニティガーデンによるまちづくり	NPO法人大田・花とみどりのまちづくり
13 埼玉県川越市	自然と社会をつなぐまちづくり	かわごえ環境ネット
14 島根県松江市美保関町	歴史ある港町のまちづくり	恵美須さんの港町づくり実行員会
15 東京都世田谷区	コミュニティ農園の挑戦	世田谷コミュニティ財団
16 宮城県石巻市	復興まちづくりと支援者の居住から	株式会社巻組
17 韓国ヨンチョン	自然と共生する参加型まちづくり	ヨンチョン市役所とNGO団体Birds Korea
18 福島県浪江町	原子力災害によるまちの喪失と再生	浪江まち物語つたえ隊

事例10. 豊山町、熟議型民主主義のまちづくりに関するまちづくりの価値

<p><b>&lt;既存のまちづくりが重視する価値&gt;</b></p> <p>(ア) 住民の合意形成を実現する価値                  (イ) 住民意見を行政事業に反映する価値                  (ウ) 住民が自発的に活動する価値                  (エ) 社会的包摂を実現する価値</p>	<p><b>&lt;実践者から提示された価値&gt;</b></p> <p>(a) 多様な町民が議論を行う価値                  (b) 町民の議論を議会と行政へ接続する価値                  (c) 町民をまちづくりの重要な担い手にする価値                  (d) 熟議民主主義と住民参加の技術がもたらす合理的議論と経験的コミュニケーションが融合的に行われる価値</p>	<p><b>&lt;実践者と聞き手のディスカッションから言語化された価値&gt;</b></p> <p>(A) 豊山町の文脈と世界の民主主義の文脈の交差する価値 (地形×歴史×誇り)                  (B) 熟議と合意形成の空間的社会的スケールを検討できる価値                  (C) 市民にある住民性と住民にある市民性を示した価値</p>
--	---	--

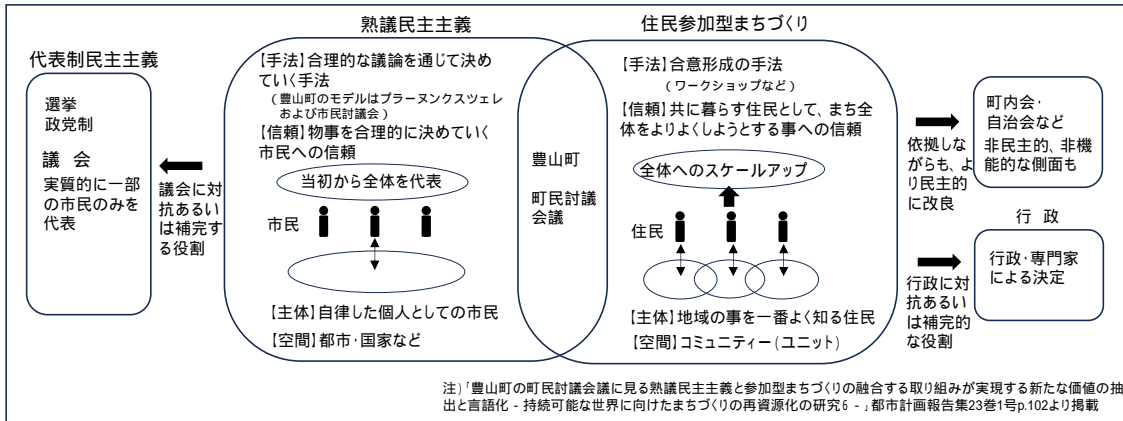


図3: 豊山町における熟議民主主義と住民参加型まちづくりの位置づけ

会議」への参加を通じ、参加型まちづくりが前提とする「住民」と熟議民主主義が前提とする「市民」の両方を担い、ふるまっていると考えられる。熟議民主主義と参加型まちづくりが、両者の違いを乗り越えて、学び合い補い合う「町民討議会議」の実践は、地域に根付きながらグローバルな課題解決を思考するという回路が成立することを示している。

更に全18事例のインタビュー結果からは、震災後隣人を助けるというコミュニティ発の実践が、地域の外国人あるいは難民を支援するという実践に通じる価値(事例4)。都市で生まれた子供たちが、親のふるさと、更には新しい土地への新たな根付き方を示した価値(事例9)、草花とコミュニティの双方向に面倒を見る関係が、それぞれの地域に応じてグローバルに適用することができる価値(事例12)、場所に根付いて住むという、個人レベル・コミュニティレベルの実践が、私たちの意識をその暮らしを持続的に実現させる地域の環境へと向ける価値(事例16)など、地域での課題解決の活動が生み出す価値が、地域の範囲を超え、場合によっては地球規模の課題に有効な新しい価値であることが確認できた。

4-2. SDGsのターゲットとの照合結果

インタビュー調査の結果把握された個々の実践活動からその目的や内容を整理し、SDGsの169ターゲットとの照合を行った(図4参照)。その結果169ターゲット中対応しない項目が数多く、反対にまちづくり活動の重要な目的や内容がSDGsのターゲットには該当しないことが明らかになった。これらは4-1で示した、新しい価値に相当するものだが、その多くがSDGsやターゲットに該当せず、まずはこれらの価値を明確に言語化することに注力すべきという判断のもと、本研究機関においてはターゲットのより詳細な照合作業をこの段階でとどめるこ

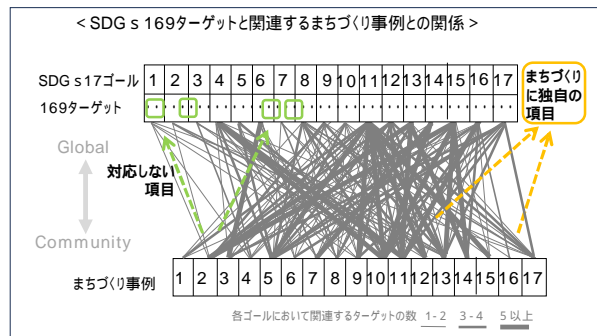


図4: SDGs 169ターゲットと関連するまちづくり事例との関係(国内17事例)

表2. 国内外で実施した共有知形成を目的とした会議

形式	日時	場所	参加者	内容
国際調査および検討会議	2023年9月13日	韓国ヨンチョン市事務所(Yeoncheon County Office)	NGO団体Birds Koreaメンバー、ヨンチョン市役所職員等	自然環境保全活動における世界的視野での連携可能性について議論
国際調査および検討会議	2023年9月16-20日	福島(4カ所)・仙台(東北大学災害科学国際研究所)・東京(田園調布せせらぎ館)	参加者101名/10ヶ国 基調講演: Randy Hester氏 (UC Berkeley)	パシフィックリム国際会議 東日本大震災の福島の原子力災害からの復興をテーマに、グラスルーツの運動とグローバルな課題解決の接合について議論
国内調査および検討会議	2023年11月3-4日	札幌市・江別市、真駒内総合福祉センター・カフェMINNA	札幌駅前通まちづくり会社、communityHUB江別港のメンバー等	調査および研究成果の報告・共有
国内調査および検討会議	2024年1月10日	福岡市 九州産業大学 景観研究センター	山下三平氏(九州産業大学 景観研究センター)等	九州産業大学シンポジウムでのディスカッション
国内調査および検討会議	2024年3月14日	浪江町 O CAFE(オ カフェ)	浪江まち物語つたえ隊メンバー等	研究成果の報告・共有

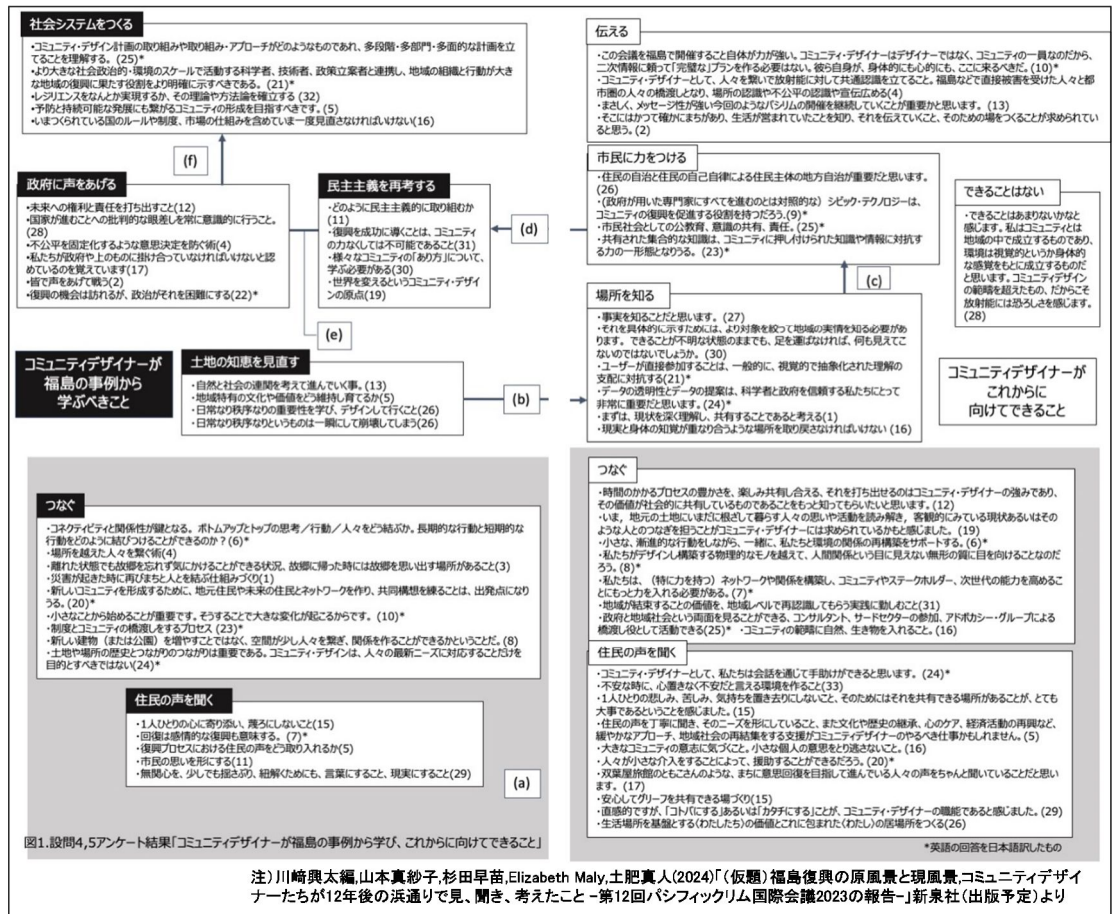


図5.国際会議での専門家による検討結果(グラスルーツの運動とグローバルな課題の接合)

とにした。4-1で言語化したまちづくりの新しい価値を、SDGsに準じるゴール及びターゲットとして提示することは、今後の課題としたい。

4-3. 国際会議等を通じた共有知の形成 (成果: 図書1, 2)

インタビューの結果は全て、インターネット上のプラットフォームにおいて、本研究の関係者(共同研究者、協力者など)が、随時閲覧できるようにした(MIROを用いた)。この共有プラットフォームを利用しながら、事例をこえたディスカッションを行い、まちづくりの新しい価値について、検討を深めた。

また、まちづくりの専門家の国際会議である第12回パシフィックリム国際会議(2023年9月16-20日開催・開催地: 福島、仙台、東京・参加者101名/10ヶ国)においては、本研究のテーマをメインテーマとして取り上げ、グラスルーツの運動をグローバルな課題解決に向けて接続するために、まちづくりの専門家が取り組むべき内容について、意見交換を行った。

特に東日本大震災の福島県における原子力災害と復興は、地域によっては全町避難というコミュニティの死活問題であると同時に、エネルギー生産と環境汚染という地球的課題を映し出しているという議論の結果、「場所に根付く」「土地の知恵(古くから伝わる民衆の知恵)」「語り伝え未来へつなぐ方法」などのローカルな価値と、「社会システム」「民主主義」「文明」などのグローバルな価値が繋がっている実態が共有された(図5参照)。

補注:

- 1)和田武ほか編(2011)「地域資源を活かす温暖化対策 自立する地域をめざして」学芸出版社、自治体SDGsガイドライン検討委員会(2018)「私たちのまちにとってのSDGs 導入のためのガイドライン」一般財団法人建築環境・省エネルギー機構、生野正剛,早瀬隆司,姫野順一(編著)(2003)「地球環境問題と環境政策」ミネルヴァ書房
- 2) Intergovernmental Panel on Climate Change:IPCC (2018)"Global Warming of 1.5", Kates, R.W., W.R. Travis, and T.J.Wilbanks. 2012. "Transformational Adaptation When Incremental Adaptations to Climate Change are Insufficient." Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America109 (19): 7156-7161
- 3) 矢作理歩 (2020)「持続可能な未来へと向かうローカルアクターとしてのコミュニティの研究」東京工業大学都市環境学コース修士論文
- 4) 土肥真人,楠本奈生,木村直紀 (2024)「豊山町の町民討議会議に見る熟議民主主義と参加型まちづくりの融合する取り組みが実現する新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究6-」都市計画報告集23巻1号p.102
- 5)川崎興太編,山本真紗子,杉田早苗,Elizabeth Maly,土肥真人(2024 出版予定)「(仮題)福島復興の原風景と現風景,コミュニティデザイナーたちが12年後の浜通りで見、聞き、考えたこと-第12回パシフィックリム国際会議2023の報告-」新泉社

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 土肥真人 木村直紀	4. 巻 21巻4号
2. 論文標題 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究1-大田区花と緑のまちづくりの活動が内包する新たな価値の抽出と言語化-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 498-503
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.21.4_498	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 土肥真人、木村直紀	4. 巻 22巻3号
2. 論文標題 石巻 巻組みの「住む」ことを追求する取組みが実現する新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究2 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 456-461
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.22.3_456	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 土肥真人、木村直紀	4. 巻 22巻3号
2. 論文標題 岩手県住田町邑サポートの受け入れ地域と連携した復興支援活動が実現する新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究3 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 522-528
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.22.3_522	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 土肥真人、木場佳音、所谷茜、木村直紀	4. 巻 22巻4号
2. 論文標題 水俣「いなか学校」にみる、大都市の子どもたちにふるさとを作る活動の新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究4 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 733-739
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.22.4_733	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土肥 真人, 土井 良浩, 太田 和, 木村直紀	4. 巻 22巻4号
2. 論文標題 黒石「横町十文字まちそだて会」の伝統的な空間を活かしたまちづくり活動が実現する新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究5 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 754-759
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.22.4_754	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土肥真人, 楠本奈生, 木村直紀	4. 巻 23巻1号
2. 論文標題 豊山町の町民討議会議に見る熟議民主主義と参加型まちづくりの融合する取り組みが実現する新たな価値の抽出と言語化 - 持続可能な世界に向けたまちづくりの再資源化の研究6 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 102-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11361/reportscpij.23.1_102	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山本真紗子・杉田早苗・Elizabeth Maly・土肥真人 (川崎興太編)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 26
3. 書名 福島復興の原風景と現風景(仮題) コミュニティデザイナーたちが12年後の浜通りで見、聞き、考えたこと -第12回パシフィックリム国際会議2023の報告-	

1. 著者名 中村千都星・土肥真人(川崎興太編)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 新泉社	5. 総ページ数 23
3. 書名 福島復興の原風景と現風景(仮題) 原子力災害によるまちの喪失と再生 -浪江まち物語つたえ隊の聞き書きを通して-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柴田 久 (Shibata Hisashi) (40352083)	福岡大学・工学部・教授  (37111)	
研究分担者	清野 隆 (Seino Takashi) (70598200)	國學院大學・研究開発推進機構・准教授  (32614)	
研究分担者	土井 良浩 (Doi Yoshihiro) (80736801)	弘前大学・大学院地域社会研究科・准教授  (11101)	
研究分担者	杉田 早苗 (Sugita Sanae) (90313353)	岩手大学・農学部・准助教  (11201)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
国際研究集会 The 12th Conference of the Pacific Rim Community Design Network, Japan, 2023 第12 回パシフィック・リム・コミュニティ・デザイン ネットワーク会議2023	2023年～2023年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
韓国	NGO団体Birds Korea		